

対話イン京都女子大 2016 最終報告書

報告者：世話役 大野 崇

【概要】

今年で 4 回目となる京都女子大での対話会が 6 月 25 日（土曜日）、同学現代社会学部の 209 教室で開催された。参加者は、学生 11 名（現代社会学部 8 名、法学部 2 名、国文学部 1 名）、水野教授、シニア 6 名の合計 18 名。学生の参加者が少なかったこと、学生の途中退席もあり、グループ対話を行わず、全員が一堂に会しての密着型の対話会となった。講師・針山氏の明快な分かり易い説明に対し、知識を吸収しようとする学生の真摯な態度、“私は原発に反対でした”といった率直かつ本音の意見、水野先生の指導による臆さない全員発言、シニアは発言を抑え学生の声に耳を傾ける配慮など、リラックスかつ活発な雰囲気のもと対話会は進行した。原子力には漠然と恐怖を抱き、反対の気持ちを持っていたが容認しても良いのではないかと思うようになったとのシニアにとってうれしい発言も聞かれ、最後に、水野先生、シニア 6 名、学生 2 名と教室で簡単な懇親会を持ち解散した。自由討論では、休みをはさんで約 4 時間の間、学生達-水野先生-シニアのトライアングルが相互に絶妙な意思疎通とバランスが取れて、建設的で宥和的な対話が成立した。今回の如く全員密着型の対話では、全ての人の発言・意見を共有できたことで今までの対話会では味わえなかった充実感があった。ただ、講演内容を中心に自由討論が行われシニアが横から口を挟む程度であったのでシニアの出番が少ないとの声もあり今後進行に工夫が要る。なお、報告者の私見であるが、女子大学生は今後母親となり子供への影響力を発揮することを考えると、学生の時に対話会を通して原子力を正しく理解してもらえたことは、放射線教育と相俟って日本人の原子力偏見改善につながり、教育大系大学、女子大学との対話会を今後増やしていく努力が必要と感じた。

1. 対話会議事次第

日時：平成 28 年 6 月 25 日 13 時～18 時 20 分

場所：京都女子大・現代社会学部 209 教室

参加者：(学生) 11 名、(教官) 現代社会学部・水野教授、

(シニア) 齋藤健弥、寺澤倫孝、針山日出夫、碓本岩男、川合将義、大野 崇

(オブザーバー) 科学技術振興財団 外園文子氏

進行スケジュール：

13:00～ 開会、自己紹介

13:15～14:15 基調講演「エネルギー問題と日本社会」

14:15～18:20 自由討論、感想、意見、閉会

2. 基調講演



講演演題：「生活を支えるエネルギーを考えよう」（講師：SNW 針山日出夫氏）

講演の要約：

1) 東電原発事故がのこしたもの

- ・天災と人災が混在。地震・津波は天災。放射線影響、情報災害・風評被害は人災。結果、地域社会の崩壊、反原発の風潮、エネルギー危機をもたらした。
- ・メディアに飛び交う言辞や冷静さを欠く報道が事故直後の世論の混乱と政治の迷走を助長。
- ・5年経っても➡県内避難者は約9万人、除染は進行するもまだ環境汚染、過剰食品基準による風評被害、地域復興・再生は道半ば、エネルギー政策は漂流中、事故の恐怖体現により新基準対策未浸透、反原発感情（社会悪）増幅、エネルギー危機の状態化と安全保障の脆弱化。

2) 原子力と日本社会の受容性

- ・事故後原発なしでも経済発展可とする割合が増加。最近の世論調査でも再稼働反対が55%。
- ・日本での原子力の社会性は➡本来技術問題が社会的事件化、国と地元行政による2重規制構造、核・放射能に対する独特の国民感情、原子力がトランスサイエンス化、訴訟での異様な司法判断（ゼロリスクでなければ安全でない）、リスク概念に

よる判断より情緒的判断、原子力の光の部分である普遍的価値が認識されておらず影の認識によるマイナスイメージ、原子力問題に対する議論が対立構造型で危うい論議。

- エネルギー問題に対する社会的成熟度は未熟➡しっかり考えないと付けが後で廻ってくる、民度以上の政治やメディアは生まれない、「母性原理」意識が強く価値共有によらないコンセンサス社会

3) 安全審査と司法裁判

- 自動車の運転禁止と同じく原発も設置・運転禁止が原則。その解除のために安全審査がある。審査は、国際的、専門的、工学的精査の集積による多層的で厳格なプロセスにより行われる。
- 福島事故で、規制基準が厳格化されテロ、シビアアクシデント対策が加わった。高経年化対策は10年ごとの定期安全レビューで対応が原則。(40年問題は技術的判断でなく議員立法で40年の妥当性判断は専門的判断にゆだねられている)
- 大津地裁による高浜3/4号運転停止仮処分は、ゼロリスクでなければ人格権が優先するとするもので、国の戦略に影響の大きい事案を仮処分で判断することは不適當。

4) エネルギー問題の論点と選択 (時間の関係で詳細割愛)

- 事故後原発は全て停止。再稼働は2基の留まり9割を火力に依存し老朽化力は日々悲鳴を挙げ何度も停電の危機があった
- エネルギー安全保障、環境問題、地政学的影響、世界エネルギー事情を広く議論し考えるべき

3. 自由討論



通常の対話会では参加者全員がいくつかのグループに分かれグループ毎に設定された対話テーマに沿って対話を実施しているが、今回は学生参加者が 11 名と少なく途中退席者もあったことからグループ別対話を行わず全員が一堂に会して講演内容を中心に自由討論を行った。以下に自由討論での話題を列記する。具体的な対話の中身は以降に掲載する各参加者の感想や事後アンケートと重なる点が多々あるのでここでは省略する。

<自由討論での話題：順不同>

① エネルギー問題、環境問題全体の論点整理 ② 原子力を受け入れたくない人と接する際の留意点、配慮事項は何か？ ③ 低頻度でしか発生しない事故でも一度起こると甚大な影響を齎す特性のある原子力発電のリスクをどのように受け止めるか？ ④ エネルギー問題と正確な知識に基づく自分自身の考え方の整理の在り方 ⑤ 原子力のリスクと便益について市民理解を得る為になにが必要か？ ⑥ 多くの市民に環境問題に関心を持ってもらうために何が必要か？ ⑦ 超長期的に考えると原子力は繋ぎの技術か？ ⑧ 食品安全と風評被害について

<学生の Q：(主なもの)>

- ・他の発電方法とその長短は？（比較すればフェアに考えられるし原発ゼロの善し悪しが分かる）
- ・原発は怖いけど必要だということも分かった。
- ・トランスサイエンスのイメージがわからない。原子力の要否の関係で。
- ・人格権の根拠がないというのが本当にそうか？
- ・福島は被ばくは避難するほどのものでなかったというが、それなら、何故東電は福島に、関電は福井に原発を作るのか。足元に作ればよいではないか。やはり、危険だから遠くに作ったのではないか。
- ・やはり原発は反対。必要だからやっているのだとは思いますが地震国を考えると心配。（高校の先生も言っていた）
- ・専門家とマイナスイメージを持つ一般の人との間に乖離があるように思う。地元の人はどう思っているのか？地元の人には反対していないのか。地元以外の人には反対しているのか。今日の話聞いて私は理解が深まったが、もっと一般の人の理解が深まればよいと思った。原発・放射能を知らない人がほとんど。周りはノンポリである。知ることで解決できる。
- ・新安全基準で炉心溶融は確実に防げるといいますが、絶対安全はないともいう。良くわからない。
- ・福島事故の実際は？いろいろな意見があって良くわからない。

<学生の感想（対話後水野先生から頂いたもの）>

・水野先生の講義に対する学生の感想

- 1) 分かったこと：シビアアクシデントの頻度について、事故率は 6000 年に 1 回である。世界の原子炉が 430 基ほどあるので $400/6000=1/15$ となり、大事故は 15 年に 1 回は

起こる計算になると理解。

2) 分からなかったことは特にありません。

3) その他の感想：事故が起こる頻度は、そんなに頻繁なものではないと言われても、福島のような大事故が起こってしまうと、素人からしたら頻度とは関係なく、とにかく原発は悪いものだと思ってしまう。でも、そのように思う人がいても、仕方のないことだとも思いました。

・対話会感想

1) 原子力問題について実際に専門家の意見を聞いて物凄く貴重な体験になりました。少人数で行われていたので質問や討論もしやすかったと感じます。原子力の全てが悪ではなく事故発生による生活の環境の変化の方が人間には影響が大きいこと、マスコミによって情報操作が行われ人々がそれを鵜呑みにしていること、改めて原子力発電所のあり方について考える機会が必要だと感じました。

2) 論理的に考えることは、とても重要なことだと思うのですが、いざ真面目にやろうと思うとなんとなく難しいように感じます。それは私が今まで訓練してこなかったからですが、私のような人間は、意識してやり始めた最初は、必要となる論理を見逃したり、知らず知らずのうちに軽率な一般化をしそうだなと思いました。昨日の講演会でも思いましたが、やはり日本の義務教育課程の中に修辞学を入れたほうがいいんじゃないかと思いました。結局論理的に考えられないから、考えることを放棄しがちになってしまうような気がして、日本人全体（軽率な一般化かもしれませんが）の危機感のなさにつながっているような気がします。

昨日の講演会は非常に面白くて、参加した甲斐が十分にあっただけでした。私は国文学科に在籍しているため、理工系の専門家の方々とお話しする機会はほとんどありませんから、とても良い刺激になりました。実のところ、私も原発に対しては怖いと思っていましたし、管理体制も悪かったという情報が私の中であって、不信感を抱いていました。私が身近で情報を得るにはマスコミが多くて、正しい情報が手に入れないなか、昨日、実際に専門家の方々にお会いすること自体貴重な体験だったと思いますし、その方々に正しい知識をお話ししていただいて、私が疑問に思っていることをお聞きすることができたのは、私の凝り固まった考えを変える本当にいい機会だったと思います。私は文系学部ですが、理系の学問も同じように興味があり、好きなので、また何かあれば参加したいです。あと、専門家の方々のお話はとても面白かったのですが、少し難しかった部分もあったので、水野先生が解説してくださったのはとても助かりました。私の父も母も意見を押し付けるような部分があるので、父母よりも年上の方が、丁寧に私の話を聞いてくださり、丁寧に答えてくださったのは、本当に嬉しかったです。あそこまで知識や経験があると、あんなふうに対応できるのかなあと思うと、私も一生懸命勉強しようと気が入りました。

4. 参加シニアの感想（順不同）

齋藤健弥氏

2年前に、初めて参加して、大学の雰囲気は何となく理解していた。前回に比べて参加人数は少なかったようだが、学生が発言する時間が多く持てたことで、何度か発言した学生もいたことは良かった。

今回は、講演に続いて、水野先生の司会により、学生一人一人から、感想、質問、意見等が発言し、それについて、講演者または、シニアが回答することになった。

学生からの発言は、講演内容に関わり、色々な問題について質問や意見があった。火力発電のメリット、デメリットや、石油やウラン資源問題、放射線被ばくについて問題、原発を何故僻地に作るのか、人格権など多岐にわたる質問があり、それらの回答について知らなかったとの感想もあり、多数の学生が熱心に参加していた。

今回は、学生からの質問等について時間がとられたためか、グループに分かれての対話会は行われなかった。対話の形式は、臨機応変に変更することに異論はないが、このような形式の場合には、シニアと学生が対面するような席替えをした方が良いと感じた。講演が、教室形式の配置であったため、シニアは後ろの席に座っており、シニアの耳が遠くなったこともあり、学生の発言が一部聞き取れなかった。また、質問の回答が、対面している講演者に集中してしまい、他のシニアが、手持ち無沙汰気味であり、時々後ろから発言するようになってしまい、学生も聞きづらかったかもしれない。従来通りのグループ対話では、たとえば3グループにすれば、3倍の時間が生まれるわけで、学生同士の対話もし易くなり、さらに突っ込んだ対話が期待できるのではないかと思う。

いずれの場合も、できるだけ学生とシニアが打ち解けて対話ができる雰囲気を作ることが肝要であり、昼食を一緒にするとか、グループ対話では、お茶やお菓子を用意するなどの工夫が必要ではないかと感じた。(2016/6/29)

寺澤倫孝氏

今回の対話会参加の一学生の感想文の一部に下記のような記述がありました。

「原子力問題について実際に専門家の意見を聞いて物凄く貴重な体験になりました。原子力の全てが悪ではなく事故発生による生活の環境の変化の方が人間には影響が大きいこと、マスコミによって情報操作が行われ人々がそれを鵜呑みにしていること、改めて原子力発電所のあり方について考える機会が必要だと感じました。」

この学生が今回の対話会において、日本のエネルギー問題、原子力問題の真実を学び、また認識をあらたにしたことは、我々シニアにとっては大きな収穫で、学生・シニアの対話集会をさらに続ける強力な **Incentive** を与えられました。

しかしながら、我々が恒に懸念していることは日本の原子力発電はどうなってしまうのかということである。恐らく現時点で国民投票などが実施されるようなことがあるとすれば、原子力発電に反対する国民は少な目に想定しても70%を超えるに違いない。不幸にして、TMI、チェルノブイリに続いて、大きな原発事故を日本の福島で起こしてしまったことが、決定的に事態を混乱させてしまった。国民の動揺も深まってしまった。

肝心の F1 事故の後処理はどのように進んでいるのか。ニュースで報道されるのは、相変わらず、汚染水、漏洩放射能、残留放射能、汚染土処理等々、いつまで続くのか、どのように解決されるのか、その見通しが、国、行政あるいは電力からは示されていない。市民の心配は募るばかりで、一向に収束する方向には進まない。

原子力発電炉の再起動も、大津裁判などが他の電力にも影響することも懸念される。

これらの問題は SNW 活動だけではどうにもならない問題も多々あるが、F1 事故における漏洩放射能はチェルノブイリと比べるべくもなく少なく、また人体に与える放射線被曝の影響については、少なくとも 1000mSv/y (自然放射能世界平均 2.4mSv/y) では飽和し、蓄積効果がないこと (WAM 理論) も既に分かってきた。今回の対話でもこの件を資料を作り説明したが、このような放射線の人体に与える影響についての認識は、もっと広く国民全体に拡がり、少なくとも間違った放射線恐怖が考え直されるような地道な活動も必要ではないかと考える。

川合将義氏

今回は、参加学生が 11 人と少なく、水野先生がファシリテータ役となり、学生全員の基調講演への感想と質問を聞き、シニアが答える形が取られた。学生は気安さもあってか、例えば「多くの大人の人と同様に原発は反対です。」と率直に述べ、質問できたようだ。そのため、シニアが一方向的に意見を言い過ぎるということもなく、うまく進んだように思われる。一方、大津地裁による高浜 3/4 号機の運転停止仮処分決定があったので、原発への厳しい意見も覚悟したが、針山氏の基調講演の分かり易い説明が功を奏して、原子力エネルギーの必要性は、反原発を告白した人にも理解されたようである。

いつもと違ったやり方だったが、全員が意見を述べ、それにシニアが答えたわけで、良く対話できたと言える。それだけに、良く指摘される知識の押し売りになりがちなやり方を見直した方が良いと思った。

放射線影響について質問があり、準備した資料に基づいて説明したが、内容が多岐にわたり過ぎたかも知れない。卒論のため、放射線や原発について調べたいが、偏りのない良い参考書の見つけ方の質問が出た。放射線については、パストール研究所の宇野賀津子氏のレビューが良いと答えたが、原子炉の安全性については、明確な回答ができず、リスト作りの必要性を感じた。夏休みの宿題として原発について調べる生徒のためにも欲しいところである。

針山日出夫氏

土曜日の開催にも拘らず自主参加で集まってくれた学生(10名)に感謝したい。講演を踏まえての自由討論では、暗黙の信頼関係の下での建設的で宥和的な対話が成立し、世代を超えた対話は機能したと感じた。これも水野先生の普段からのご指導の賜物と感謝申し上げます。

学生達の発言はどれも率直で本音の意見だった。原子力問題に対する自分の考え方が肯定的に変わったと述懐した学生もいました。全ての学生が自分の意見をしっかり持つ事の重要性を認識し感想や意見を述べたことに満足しております。

今回は学生数(対話時には10名➡6名)とシニア(6名)のバランスが悪く、発言の機会が少なかったシニアにとっては燃焼不足であったと感じる。対話では基調講演に対する質疑応答に終始したが、事前のテーマ設定が必要と感じた。

碓本岩男氏

京都女子大での原子力討論会の参加は、昨年に続いて2度目です。前回は文科系の女子大生との原子力に係る討論ということで、噛み合った議論になるのかを心配していましたが、この心配は杞憂だったので、今回はどのような議論になるのか楽しみでした。

休日の土曜日であり、討論のテーマが原子力という固いテーマでしたが、11名の学生さんが参加してくれました。参加者が少なかったこともあり、グループ分けはせず、皆で討論しました。

京都女子大での討論会は今回で4度目ということでしたが、今回参加した11名の学生さんは皆、初参加のようでした。それでも水野先生が積極的に学生の意見、質問を引き出してくれたこともあり、今回も学生さん全員の意見を聞くことができました。

多くの学生さんが今回の講演、討論で原子力への理解が深まったこと、原子力には漠然と恐怖を抱き、反対の気持ちを持っていたが変わったこと、必要性が理解できたことなど、シニアにとっては嬉しい意見がありました。

討論会後の学生さんの感想を水野先生から送って頂きましたが、この感想を読むと、世代を超えて、シニアの思いも伝えることができたのではないかと感じる事ができました。ただ、残念なのは、昨年度と同様、学生さんの質問に真摯に答えるためにやむを得ない点がありますが、シニアの発言時間が学生より圧倒的に多く、学生の意見を多く聞けなかったことです。

エネルギー問題、原子力問題を正しく理解してもらうためには、あまりにも多くの情報を提供しなければならず、限りある時間での講演、討論だけで十分な説明をするのも、理解してもらうのも現実的には困難だと思います。ですので、この討論会の時間だけでなく、学生さんにずっとエネルギー、原発問題を考えてもらい続けるために、学生さんの意見を多く引き出せる工夫がもっと必要であると感じました。その方法の一つは、少人数でもグループ分けして学生さんの発言機会を増やすことだと思います。

それでも、今回も学生さんにエネルギー、原発問題に興味を持って頂けたことによって、シニアネットワークの活動が有意義であることも実感できました。

大野 崇

2012年、2014年、2015年に引続く4回目の開催であり、私にとっては初めての京都女子大学であった。今回世話役を務めたが、これまで今回基調講演を行った針山氏が務め、しっかりしたルールが敷かれており、京都女子大学における対話会は環境社会学科の

水野義之教授の熱心な指導方針のもと軌道に乗った感がある。

環境社会学部から8名、法学部から2名、国文学部から1名の計11名が対話会に参加し、最後に水野教授と参加シニア6名及び学生2名と教室で簡単な懇親会を行った。

シニア針山日出夫氏による「エネルギー問題と日本社会」と題した基調講演の後、水野先生の指導で、基調講演に対し、学生全員が一人ずつ質問・疑問・意見を述べ、これに対し、講師、水野先生、シニアが加わり、自分の意見を自由に述べ活発な雰囲気の下に対話が進行した。当初女子学生なので発言を躊躇するのではないかと思っていたが、発言は積極的で取越し苦労であった。グループに分れて対話を行うのがこれまでの対話会であるが、今回はフルタイムの学生参加ができなかった、対話テーマを設定されなかったことから全員一括対話となったが、発言が活発な場合はこういう形式もありという感想をもった。学生達の発言はどれも率直で本音の意見で、原子力に懐疑的な学生が自分の考えが肯定的に変わったとの発言もあり、実りのある対話会であった。女子学生は今後母親となり子供が母親の影響を強く受けることを考えると、女子大や教育系の大学での対話会を増やし少しでも原子力への理解を深めていく活動の必要性を感じた。

最後に懇親会風景



以上